

記録
16ミリ
カラー／25分

■企画
科学技術庁

スタッフ
■製作
村山英世
■脚本・演出
杉山正美
■撮影
春日友喜
■照明
一ノ宮 晃
■解説
小林恭治

文部省選定

時間を止めて変わらない姿のまま物を保存することは、昔から人間のつぎない願望であった。この保存といういかにも人間らしい努力と工夫の足跡を科学の眼でとらえた作品である。



1972年、中国で発掘された馬王堆古墳は、優れた保存技術によって世界を驚かせた。その遺物に、生命の保存、物質の保存、そして情報の保存の願望をみることができる。

現代の身近なところでの保存の工夫をみると、保存食品などに昔から受け継がれ、今もなお使われているものが数多くあることに気がつく。その重要なもののひとつに、乾燥法がある。食品の保存に利用されている凍結乾燥法や冷凍法は、菌や細胞を生きたまま保存する生命保存の方法として活用され、医学の治療や研究にもおおいに役立っている。

種を残すこと。これも自然がつくった巧妙な保存の方法といえる。2000年前の種子から花を咲かせることに成功した大賀ハスは、種子が果皮によって守られた天然の保存のカプセルであることを教えてくれる。農林省の原種保存の種子貯蔵庫では低温、乾燥、密閉という保存の条件を人工的に作りだして、種子の遺伝子情報を保存している。

写真はいつまでも変わらない姿を保存することを可能にした。また本をフィルムにかえ保存するマイクロフィルムや磁気テープなど情報を簡略化し長持ちさせる技術は、日ごとに進歩している。数値として人工衛星から送られてくる衛星写真も、新しい情報保存の方法である。日本各地の環境情報も一目でわかる。人間にとって保存とは一体何なのか、今後人類は、何を、どのように保存しなければならないか、改めて考えてみよう。